

「愛の献血」助け合い

7月1日から31日までの1カ月間、全国で「愛の献血助け合い運動」が展開されています。

毎年夏の季節になると、夏休み等の影響もあって献血者が減少する傾向にあるのだそうですが、私は随分昔から、献血が趣味と自負する位献血をして来ました。日赤から感謝状もいただいています。

献血という方式は今では当たり前のスタイルですが、戦後スタートした血液事業は、民間による買血方式でした。

血液が売買されるという事になると、失業等によってお金に困っている人の中には、自分の血を売ってお金を得ようとしている人が出てきます。やがて、頻繁に売血する人の健康問題や、「黄色い血」といわれた質の悪い血液が出回るなどしたため、買血制度そのものへの批判が高まり、昭和39年8月の閣議決定で、輸血用血液は献血のみによって確保する事が決定されます。その後、いくつかの変遷を経て今日に至っていますが、国民に安全な血液を供給するためには、一人でも多くの献血者を必要としている状況は変わりません。

今日のように医学が進歩しているのに、何故献血を必要とするのかといえ、血液は、依然として人工的には造れないからなのだそうです。

また、血液製剤は長期間保存できず、中には、血小板製剤等のように有効期限が採決後4日間しかないという短いものもあります。

輸血を必要としている方々に安全な血液を安定的に供給する為にも、季節を問わず、常に多くの方々に献血していただかねばなりません。

日赤の調査によると、平成22年は、全国で延べ532万人の方々が献血に協力しています。大変多くの方々が献血に協力していますが、15年前の平成7年の献血者数は延べ630万人でしたから、当時と比較すると約15%も減少しています。

また、献血者数を年代別に見てみると、30代の方はほぼ変わらず、40代以降の方はむしろ増える傾向にありますが、少子化の影響もあり、10代と20代の献血者は大幅に減っています。このままでは、いずれ献血の絶対量を確保する事が難しくなるのではと、懸念されます。

献血にも年齢要件があり、献血の種類によって異なりますが、健康な方であれば16歳から69歳まで献血することが可能です。という事になると、私が献血できる期間もあと僅か、少し寂しい気分です。(塾頭 吉田 洋一)